

## 最新技術を導入し、効率化を達成 北海道更別村 渡 基文氏インタビュー

北海道<sup>さらべつ</sup>更別村は十勝南部に位置する大規模畑作地帯。ここで畑作を営む渡 基文さんは約45haの農地で十勝の一般的な畑作4品（小麦、テンサイ、パレイショ、豆類）とスイートコーンを生産しています。

渡農場では長年に渡って適正な輪作体系に努め、定期的に牛ふん堆肥などの有機物を散布し、健全な土づくりに取り組んできました。そうした成果が実を結び、昨年度は全道的に不安定な気候のなか、小豆「きたろまん」で道平均単収の2倍近く（10アールあたり386キロ）を達成。第47回（平成30年度）全国豆類経営改善共励会 小豆・いんげん・落花生等の部で「農林水産大臣賞」を受賞しました。

広大な面積をほぼ一人で作業する渡さんは、近年作業の効率化と省力化に特に力を入れています。そのためにGPSガイダンスの自動操舵システムなど最新機器を積極的に導入。これらの機器を使いこなすには、基本の技術を理解することが重要となりま



北海道更別村出身、今年35歳の渡 基文さん。「温泉ソムリエ」の資格を取るほどの温泉好き

す。試行錯誤しながらも、さまざまなことに挑戦し続ける渡さんにお話を伺いました。

### 東京で会社勤めを経験後、ふるさとにUターン

就農して約10年になりますが、子どものころは農業を仕事にしようとは思っていませんでした。地元の普通高校を受験し、大学は札幌に出て経済学部に通い、卒業後は東京でセキュリティーサービスの一般企業に就職しました。

サラリーマン生活は毎日仕事が忙しく、

わたる もとふみ 第47回（平成30年度）全国豆類経営改善共励会 小豆・いんげん・落花生等の部「農林水産大臣賞」受賞

周囲の人たちもピリピリと疲れていて、いつも息苦しい感じがありました。約3年が過ぎたころ、ずっとこの環境で生活するよりも北海道で農業を営む方が自分には合っているのではと、2008年に会社を辞めて更別に戻りました。せっかく地元で基盤があるのだから、農業で勝負してみたいと思ったのです。一度ふるさとを離れてみて、客観的にその良さが実感できたことも大きかったと思います。

とはいえ、当然ながら農業はそう甘くはありませんでした。最初は父親と一緒に仕事を覚え、だいたいの手順を飲み込んだ5年後に経営継承。しかしその2年後の春に父親が亡くなると、急に状況が変わりました。それまで肝心な部分は父親に任せていたので、いざ一人になると多くの作業が「これで大丈夫だろうか？」と不安になってしまったのです。

スイートコーンの播種が浅すぎて、ほとんど芽が出ないことがあったり、ささいなことも加減がわからずに苦労の連続でした。もっと詳しく聞いておけば良かったと後悔もし、一人になってからが本当のスタートだったと思います。

それからは、わからないことはすぐ周りの人たちに聞き、素早く解決するようにしました。同時期に就農した友人や、地域の先輩たちに次々と電話をかけ、それでもわからないときは普及センターや農協に問い合わせ、納得できるまで追求します。中途半端にできないのは性格かもしれません。しっかり教えてくれる優秀な人が周りに多



基文さんで畑作農家3代目となる渡農場

く、害虫についてはあの人、病気の相談はこの人、とそれぞれにスペシャリストがいるので非常に助かります。

また、北海道農業士協会という組織にも所属し、他の市町村の人とも交流するようになり、情報をもらったり勉強したりするようになりました。

農業には当然ものすごく忙しい時期はありますが、ポイントを抑えたやり方次第で自分の時間が作れるので、今の生活を選んで良かったと思っています。

### 小豆落葉病に強い「きたろまん」

現在の経営面積は約45haで、今年是小豆を4.5 ha、小麦を12.8ha、テンサイを9.5ha、バレイショを9ha、スイートコーンを3.6ha、その他に大豆などの豆類を作っています。

小豆は以前「エリモショウズ」と「きたろまん」を半分ずつ栽培していましたが、数年前にすべて「きたろまん」に変更しました。「エリモショウズ」で小豆落葉病が発症しやすい畑があり、輪作を回していくのが難しかったためです。落葉病抵抗性を持つ「きたろまん」は耐冷性にも優れた早生系統で、十勝の気候にも適して作りやす



小豆の品種は早生で耐冷性、落葉病抵抗性の「きたろまん」。撮影は7月上旬

い品種だと思います。

ただし、晴れの日が少ない年などは短莖化しやすい特性があり、そうなると機械での収穫がしにくくなってしまいます。対策としては適期に追肥することが重要ですが、肥料が多いと茎が伸びすぎて倒れてしまうので状況判断が難しいです。小豆は一度倒れると二度と戻らず、サヤが地面につくと等級が一気に下がってしまいます。いつも「伸ばしたいけれど倒したくない」というギリギリのせめぎ合いです。

豆の収量や等級は、秋になるまで予測が

つかない部分が多いと思います。開花後も日照や温度に大きく左右されるので、毎年収穫が終わってから「もう少し追肥しておけばよかった」と反省することも多く、これまでに100%満足だった経験はありません。まだまだこれからです。

### 父から受け継いだもの

親戚が隣町で畜産業を営んでおり、私たちの麦稈と交換で牛ふん・豚ふんをもらい、長年畑に入れていました。そのせいか天候不順な年も収量が極端に低下することがありません。近年の北海道は大雨や台風など極端な天候が多く、小豆栽培も苦しい状況が続いていますが、そのなかで平均収量の約2倍を確保できたのは、父親が健全な土づくりを続けてきてくれたからだと思います。今回の受賞もそのおかげですね。

それから、父親が口ぐせのように言っていた言葉が役に立つことがあります。その一つが、「春の播種は畑が白くなるまで待つ」というもの。近年、周囲の農家は雪どけ後の作業をできるだけ前倒しする傾向にあります。そのほうが後の作業が楽になり計画も立てやすいので、土がまだ乾いていない段階でいろいろな作業を始める人が多いようです。しかし、私は父の言葉が身体に染み込んでいるせいか、違和感があってできません。

雪どけが終わり、土が白く乾いて気持ちよい状態になってからゆっくり種まきをします。周囲の畑より遅いスタートになることもしばしばですが、結果的には良い生育

に結びついているようです。あせらず、適切な時期に一つ一つの作業を確実に行うこと。そうすることで虫や病気に強い丈夫な苗が育ちますから、それに勝る薬はないと思います。

また、父が亡くなったときに、いつ、どの畑で何の作物を作っていたか、収穫はどんな状況だったか、思い出せる限りの記憶をさかのぼってパソコンで一覧記録を作りました。いま残しておかないと、どんどん忘れてしまうと思ったのです。これも父親から受け継いだ大事な財産です。

現在は自分の毎日の作業を「3年手帳」に記録しています。今年でもう3冊目になりました。これは来年の自分への申し送りです。それから、もし将来子どもたちが「農業を継ぎたい」と言ったときに役立つかもしれないですよ。ただし、4年ほど前の手帳を見返すと、自分でもずいぶんトンチンカンな作業をしていたと驚くこともあります（笑）。

### 最新技術で効率化とストレス軽減

周りには、父親、母親、本人、妻と家族で仕事をしている農場が多いのですが、私はほぼ一人です。そのため、できるだけストレスなく効率的に作業できるように、新しい機械投資は積極的に行っています。

2年ほど前にGPSガイダンスの自動操舵システムをトラクター3台に導入し、施肥などに活用しています。とくにここの畑は変形的な地形が多く、これまでは肥料を二重にまいてしまうことも多くありました。

GPSを導入してからは、最初に畑の情報をインプットし、単位当たりの施肥量をセッすると自動的に調整してくれるため、肥料が重なることがなくなりました。作業が楽になりコストも大幅に削減できます。用意した肥料の袋が、計算通りピッタリなくなると気持ちがいいですよ。

そのほか、病害虫防除や除草作業でもドリフト発生が軽減でき、春の整地や豆類の中耕作業、主にテンサイの播種と収穫作業などが劇的に楽になりました。テンサイは播種時のデータを保存しておく、収穫時はそれに従ってトラクターが走り、自動で掘り上げてくれます。私はそこまでませんが、夜暗くなり、周りが見えなくても作業が可能です。

こういう最新機器を使うことで時間や労力はもちろん気持ちにも余裕が生まれ、次に何をしようか落ち着いて考えられるのが大きなメリットだと思います。

しかし、全くの初心者もGPSや自動操舵システムがあればラクラク作業ができるかということ、それはちょっと無理があると思います。自分で作業をきちんと理解し、普通にできる人でないと、上手く使いこなすのは難しいのではと思います。技術の研究は素晴らしく進んでいて、トラクターの運転の誤差はほんの数センチですが、それぞれの作業機に合わせて微妙に調整するなど、導入当初はかなり試行錯誤を重ねました。最初の苦労で簡単にあきらめてしまう人は、使えないかもしれません。

初期設定の段階では面倒なことも多いの

で、それより「奥さんに乗ってもらったほうがいい」という方もいます。それぞれの考え方です。私はせっかく導入したので、わからないことがあれば詳しい人に聞き、納得できるまで追求しました。GPSは1年早く使っていたら大先輩ですから、教わる人は地域にもたくさんいます。

しかし、こういう機器類はどちらかというと趣味的なもので、そのために借金はしたくありません。ですから、余裕のあるときに無理のない範囲で導入しています。

### 不耕起栽培にも挑戦中

そのほか新しい試みとしては、まだ一部の畑ですが数年前から不耕起栽培を始めま



GPSガイダンスの自動操舵システムを設置したトラクター内。経営面積が広い更別村ではこうした最新機器を導入する農家が増えている



効率的な作業のために、さまざまな機械を使いこなす

した。試験的に小豆、小麦、テンサイに導入していますが、小豆に関しては、大雨や異常な乾燥が続いたシーズンでも極端な被害がなくなったという印象があります。反転作業をして表土に有機物がなくなると、雨風などで土が流失したり、大雨が降るとパンパンに水がたまったりしますが、不耕起ではそういうことが緩和されるのがメリットです。

ただし難しい点もたくさんあります。例えば表土の残さ物が多すぎると播種の際にじゃまになるので、小麦の殻などはとくに細かく裁断しなければなりません。鎮圧不足にも気をつける必要があります。不耕起だから作業が省けるかという点、逆にいろいろな手間が増える部分もあり、一概には言えません。

昨年度はテンサイで少し上手くいかない畑がありましたが、途中であきらめるのは嫌いなので、改善策を探しながら今年も挑戦を続けています。

### リフレッシュは毎日の温泉

趣味は温泉で、一日の仕事を終わるとよほどのことがない限り一人で温泉にでかけます。温泉施設は村内にもありますし、十勝はどこも温泉だらけですから少し遠出することもあります。1日2回行くこともあり、1年で340回は入っているんじゃないかな。冬は家族全員で温泉旅行にでかけ、夜に自分だけ別の温泉に入りに行ったりもします。

ここまで好きになったのは、リラックス

できて気持ちがいいのはもちろんですが、1日のオンとオフをはっきり区別できるから。自宅が仕事場である農業は、オンとオフの区切りがつけにくく、忙しいと夜遅くまで作業を続けてしまいますよね。それもしょうがない時期はありますが、作業効率は落ちますし、翌朝の仕事に影響します。

私はできるだけ朝早く起きて作業にかかり、夕方は早めに切り上げて温泉につかり、リフレッシュしながら明日するべきことを考える、というのが日課です。忙しいときほど、無理に時間を作ってでも温泉に行くようにしています。もはや義務ですね。たまに家の風呂に入っていると子どもから「どうしたの」と言われます。

また、雨の日は一切仕事をしないで、倉庫にもいかず完全休日にして遠くの温泉まで遠征します。そうすることで、生活にリズムができて精神的にも健全でいられると思います。

農業経営は大規模化が進んでいますが、私は極端な大規模経営には正直なところあまり興味がありません。今後も自分が無理なく、家族にも迷惑をかけず、収益を上げ持続できる農業が理想であり、そのために技術を磨き、新しいことにもチャレンジしていきたいと思います。

毎年すべての収穫が終わり、あとは雪が降るのを待つだけの時期に感じる達成感、農家をやって良かったと実感する瞬間ですね。それと同時に、この土地でこそ楽しめる生活の豊かさも大切にしたいと思っています。



見渡す限りの小麦畑。品種は北海道で広く栽培される「きたほなみ」



更別村をはじめ十勝全域の一大産品であるスイートコーン。缶詰などの加工用が多い